

繪本拾遺信長記 六

3564  
19





門 13  
號 3564  
卷 19



繪本拾遺信長記後篇卷之六

目録

英名永沈渡川幸

兩下回幸幸又陣城をとり

幸幸大に敵兵を破る

幸幸極尾に戦ふ

中が信忠御陣陣之幸

幸幸入る

早稲田 大學 図書館  
昭 34.6.3 樊  
藏 書



秀吉小密茶が首と実徳はゆふ

小笠郷中騷動之事

水練をいへるを幸が鹿と探る

小笠村固章

百姓又九郎画餅之高名事

百姓又九郎控は即ち名を何へ

又九郎画餅の事名

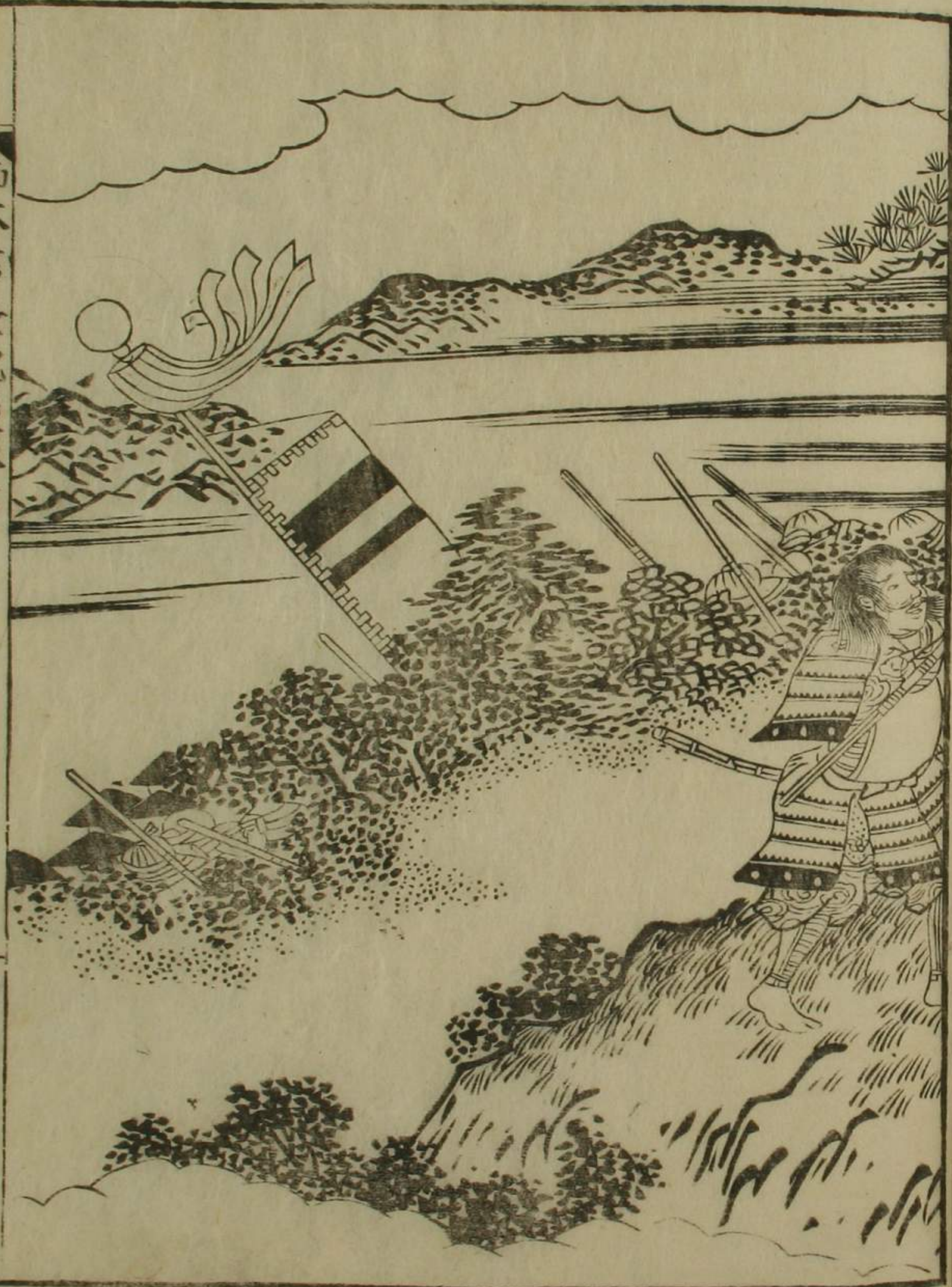
村舟長門守惣て百姓名と紀明は

繪本拾遺信長記後編卷之六

英名永泥渡川幸

け耐石山の城の中は鈴木重幸きのみより小清水表へ出張  
いまは降城の沙汰なりとれは上人の事も安うぬりよる  
と家老下間刑部卿法橋日進に守名をとるは汝西人小清水  
みの陣又あり勝負を論せは重幸と何人ゆべし若し重  
幸又あやまらばいふ小悔むともゆべしとてとくくと  
急せ給へば両下間かゝりこまり六百余騎の兵士を降人馬を  
流して小清水もまたそれ味方の軍七烈八裁又崩れ礼を  
重幸の僅に三十余人の士率と降人小清水は馬と取れし  
敵の兵勢と隙を居り下間刑部卿かくとるより馬より







飛り重幸が幕に走り来り軍師乃其なき様を以て  
 けとの安堵はしと人軍師の攻城せざるを以て海心と痛め  
 終ひ某を命じ運へゆらんき旨終ら息とさうり其  
 とをせそ中しく只今来着せり幸い軍兵と引率して  
 来り以人のけ場の某をまうせり是又攻城ありと  
 人の衝心と中とあらまひに「馬の轡とえて引入る  
 重幸態と夢とけりげこいさうたすをけいりある石山  
 の城の中より希ありとまうせり鈴本重幸先を以て  
 我は勝負も見極め地人芝居は浪り逃げりさうり  
 去りし弓矢を敵の恥辱とてけりや吾の皆寺院の  
 護衛の武士の勝を知るまじ似合ぬ我場は長居せん

ちやく本城は弛久り特口を固め不虞の勇とふせ  
 り久くも城の中不勢とて心元は「又攻め急ぎ陣  
 撤せらるべし」と考ふ遠ひ重幸が悪口何れもあさうり  
 あはし人の物とをむき攻めはしとあさうり某を得て  
 退きやはしむるもよとゆんとあはして争ふに  
 羽柴が軍兵急いしく周をゆる雲のどく押来り  
 夢くよゆりたる石山の城の中を急神とゆてう根  
 の小畚茶を加え清正が良本村又我が討たうり  
 む下同刑郊野と清正の軍のさまうり又足利は  
 られり人やと鑑の神とさうり利まらぬ重幸怒りて二三回  
 えて板付むぐり来り款の中へ「一文字に編入り羽柴が





山崎の戦い



三ヶ月の  
重幸  
大に敵兵を  
破る

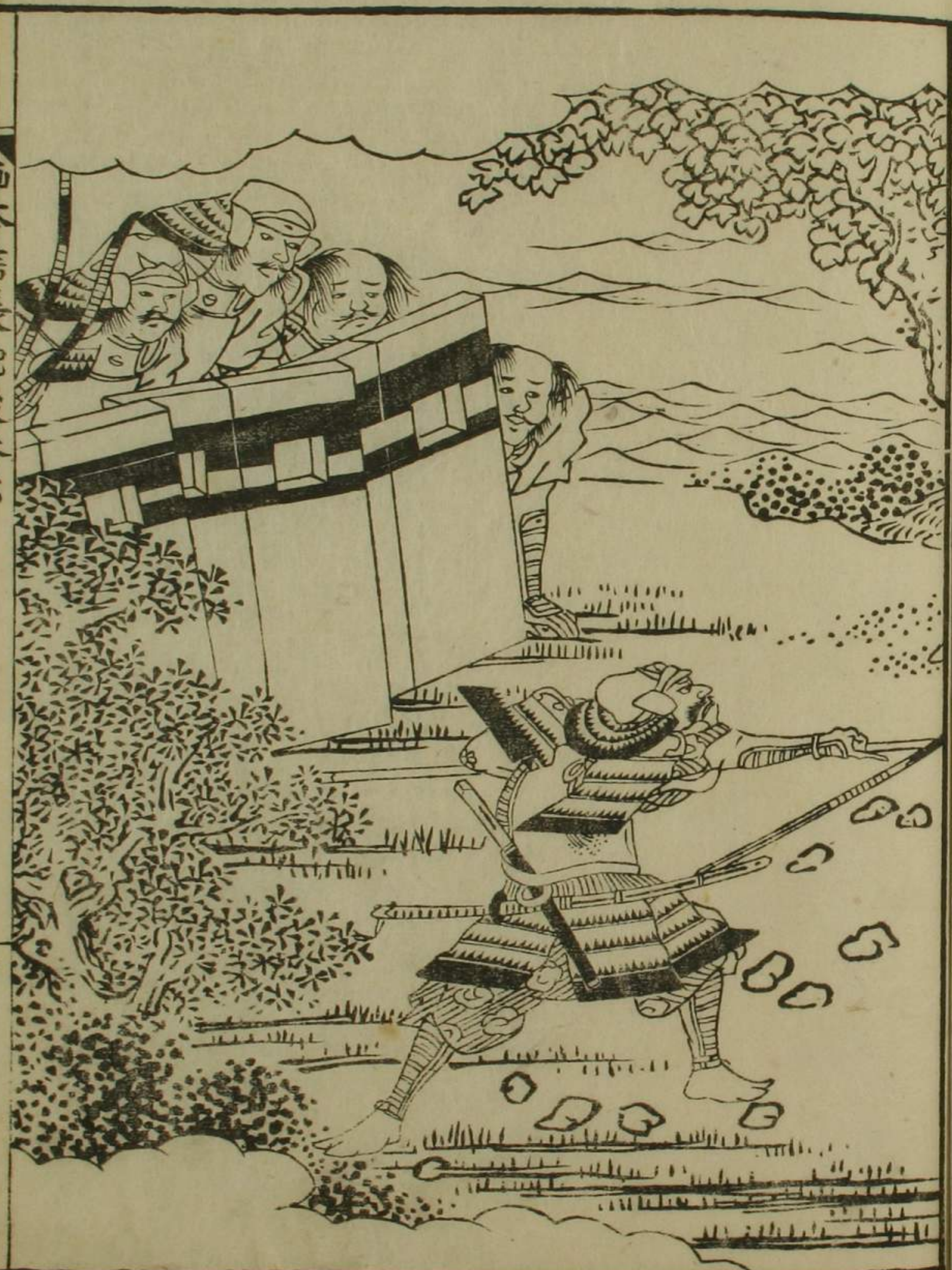
重幸の戦い



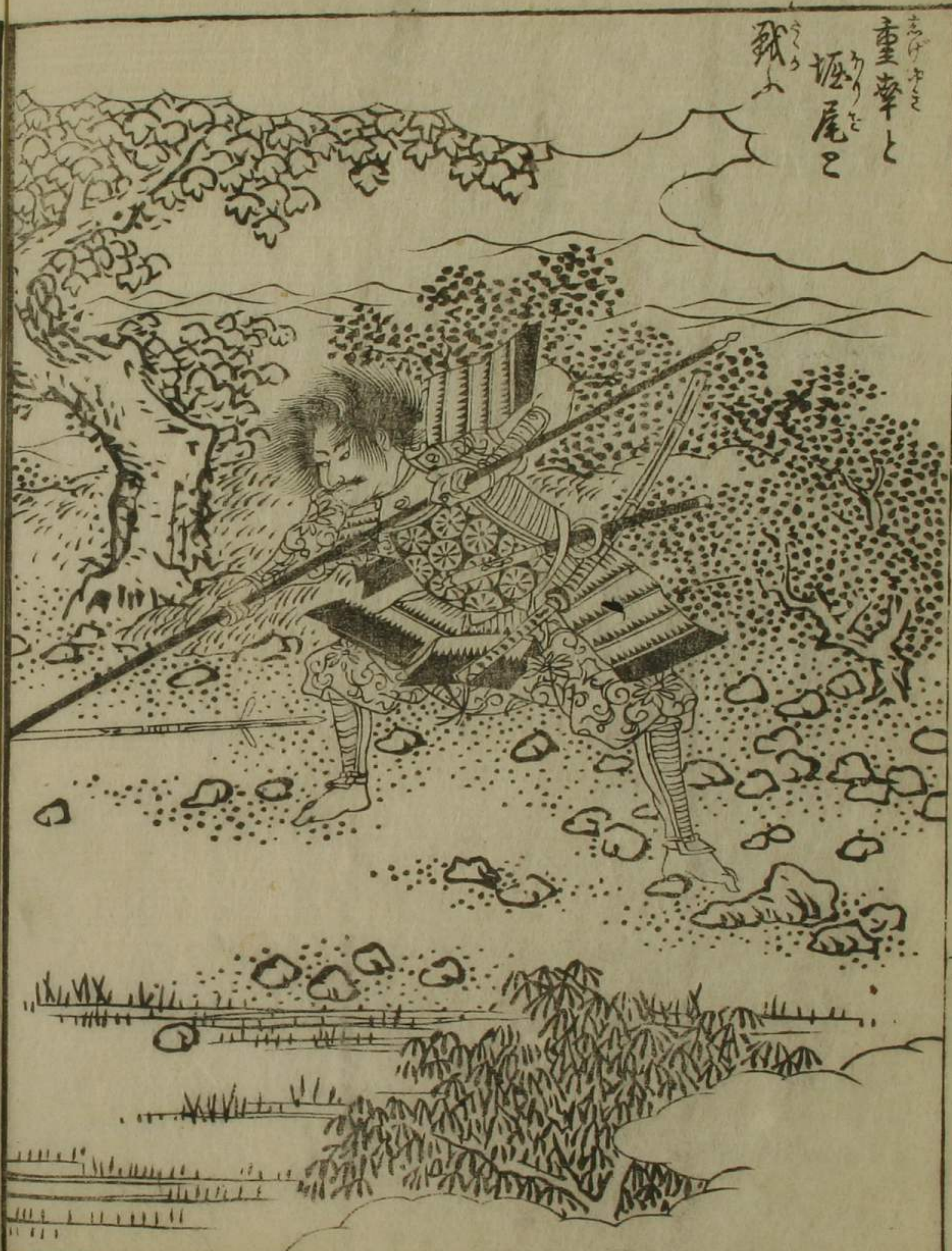
軍兵八面より追々圍むるとい重幸ぞ捨本ありぞ我討とめて  
 多々名せんと槍乃徳先と並べつるの秋の狩よせし爲の徳の  
 風は吹るごとく之重幸何ういふがもたせらるるが如しと一  
 嗚くと月久しグ十重二十重と罵もたる大軍と只一まくり又  
 破れ後より進み来り中村源平次が軍隊と突崩しあはれ向  
 て奔る者の薙幸へ猛馬の怒るとい馬と飛して近所あり堀  
 尾帯刀右膳見事と叫びつゝ十文字乃槍と捨つて突来り  
 重幸尾目よりく槍をたるとい突んぞり射誰が敵つとも  
 志ぬ流丸重幸が馬の右腹を門と射抜るい大地へ落ると  
 足しがひ徳の重幸をさふりく後とまよふ三回斗飛りつる  
 堀尾も後又馬を飛ばしつる槍をうらむと戦ひつるが互にばあ  
 け

劉勇るれは毛髪を入る透間もく射むりぞり合ける  
 くれぞ今日の刃物と羽柴が軍兵八面より圍む徳波と  
 堀のく槍と助くいふしつる堀尾が持つる十文字乃徳先  
 三寸討ちて空中に飛りつる重幸躍り上り突んこころ  
 を堀尾が良等勇武の姿へつる若者三人切されと並べて切か  
 りとは其間又帯刀いし退きて息と残つる重幸怒りて槍  
 棒と延べ一人が上り掴んで門とせし上げ七八回振つり又  
 着砕けて忽ち刃を幸持つる槍をうらりと捨てたると廣  
 げ飛りつる刀いしが足とよく今一人ををぶとあこまう  
 蹴上げ又一人が利腕をくちかひたをばし弓矢の服まで一ま  
 るは眼をい息をうらけあさま又恐怖して放て道走





重幸と  
堀尾と  
戦ふ





若りぬし重幸大者よ呼り門く鈴木が討死のあこまとうく見  
 押して後の世の物ごううよせよとまうの門く獲武者又六騎  
 きて救殺し二人をとりて取服うひ返と後川堤よりけり  
 漏まればうる水危人終よ入あぞぬしううう羽柴が惣軍は  
 をとく重幸のいびうり沙兵多討死と勝岡と焼り惣勢  
 一夜又追討せり下回刑部日近に守六百余人さんぐ討  
 らされ石山にして引移と余はまじと押ひ移るのきの後兵  
 又向いさる石山の軍兵に余余人重幸が計と受け境の下に埋  
 伏し先うの軍と余はにんぐ押へが忽老右より殺りま  
 新子とひてさんぐよ我ふよど眼柴が勢をい返けぬるは  
 討り若殺を知りばけ討奔る朝神勝領笑のあ人よ命く

石山勢の中へきびしく鉄炮と打入せ少しをらじ其間又軍  
 勢とまらぬと引移と石山勢も重幸小密茶討死し  
 途方をじらふ討りまば又殺て我いとぬまに相引あぬく  
 石山城へゆりたる

中取信忠御降陣之幸

鈴木源市志摩よに即両人の去る廿八日の夜子越を幸が  
 とうひにじて三百余人の兵率と飲し後川の下流と後し信忠  
 の本陣へ取討せんと押しせしが其間七八丁あぬり先年候と出  
 款陣のうりさまと何よよ元素茶を後者をひて款の籠あふる  
 きを破りと後進しこれに明智惟信のあぬるく波ひりく境の  
 緒とあぬ鉄炮と火繩をとく用心堅固よるあなる鈴木源市



画不言事也後卷六



去中  
入水



画不言事也後卷六



樓にお遠し美くあざむかすもく留きたりし居るるに  
ちや川南の岸は合戦始りしとてく因のまらうし火の光り  
騒しくまこれ信忠御の所陣も備人とまるとまらう弛ゆる  
き乃形勢るれば給ひてまらうとまらうとまらうとまらうと  
不詮合き勝利ありくともまらうと信忠と喰らめどん川と後  
して赤の舌に力と併せ味方の戦ひ難きあらざしとて陣外  
水の方より左家に火とつけ焼きたるふ杉節風強くあらざ  
端陣居のよにゆりひくまらうと因のまらうとこれ信忠御  
死んぬの若大ぬこれ馬も石を籠るの勢と引て陣外を  
出給ふを明智惟恒とて引らまらうと世款の勅諭も何れ  
とごりに馬と出給ふ大ぬ軍のまらうとあはれ大ぬまを勅き

終つ味方の兵士散乱しと款の謀計も漏るべし我もあ人計  
兼成捕へまらうと只中軍もまらうと諸軍の發勅と終り終  
と備り有れば信忠御実れとく藤元とくまらうと發給者  
つら軍法をいさんと御中知あは明智惟恒軍中と驅せり  
一人も發勅せば大ぬの所をに引出し首と刎たしと福とる種  
よ石山勢の方を激して火と殺ら岡谷也とも小田の諸勢も  
日勅せし備人を發せまらうとく扱ひこれ元来小勢の石  
山勢狼りに討せんといふはしとく近辺に細細し若も小田勢  
川と後さ其處にまらうと折崩さんと疾れとく頼ひ居る  
と明智惟恒のあ人只堅固と本陣と守り疾り明とまらう  
まらう今にけあはまらうと冷皮しとく益て争奪が給せしとく





秀吉小密  
 茶が  
 首と  
 実持  
 体人





まより又よ石山城へ引えたりと云わが小羽柴藤原守秀右衛門  
款を三度あげさせ小治みの陣とえらひ信忠御の陣陣よま  
我ひの始終審よ言正し小治茶と首と上落よ傳人ぬよ信忠  
大寺小治し終ひ教奉が同味方のお大とやませし重幸小治  
茶を只一我よ討えり比教なき勲功と稱し終よ秀右衛門  
君の威威を以て軍よは勝てし人ども終本重幸入めし其  
首と得びし保元兼謀計勝れ者よ人び生死の程し其  
かみ保えりしに長く陣陣と居られり不慮の災し斗り  
かしく國中に騒動し又味方兵糧の運送も心よまうせし一  
度河津國ありし終りしとやみより信忠御け城よ月せよ  
又よ谷川を河津とらひめりは及安出へ返城し終り

小治郷中騒動事

叔父小田内大臣信長といひ今度秀右衛門計策より年ころ  
怒りおがしむる事幸といひめせし根末乃悪僧小治茶  
討えりし時様と敵し終りども重幸が生死定りたりし  
心を安んじ終りし系部乃同代村丹長門守又佐て渡川乃  
水危しあ練の者といひ重く事幸が死骸やけつと探し  
求り終りよけ我ひよあ死の者に人もありされと又一人  
と死骸いよえりよはしと事よより使申り河津の果濃の  
うれびとや大澤よ々流さつらんは母がしそれども若や  
命よが人再び石山よ々終りぬらん又討死乃報きとい  
終く世よよ沙汰せし密よ近より怒し終りよ々



内々長門守を命じてより石山乃城へ回着と入まじくは  
 村并命を命じてより石山乃城中へ回着と入まじくは  
 史修ふより重幸が討死にお遠るはよりや工人を始り城中  
 乃お率朝夕を幸が戦死と歎きけむより工人自吊ひの  
 法よりと福んごらよ後一終ひ工下の人々愁傷のありさま  
 して何れと若くは長門守を討死せしとお遠るは  
 重幸生てあんのころり石山乃城に居て何國より  
 長へきさのころり京中より在郷に居るはあつて我後  
 月乃落度多るは飽まじく吟味せんは如くは洛中外  
 いつよも及びは近きを郷へ廻着を命じて重幸が在石と若け  
 所る若くは獲るは過かよは法とてと觸過しる京中乃

まうんべ集うて是や史修づこのはごらも求めしりし人の  
 物がよりよ同く工人を獲り得んは家に難くと私云あひ  
 て多ひるる家よ小井郷乃中よはしく言しる下百戦指に即  
 とつる男あり八九年以若より此郷中よ住居はして朝夕乃  
 烟えまうひこれと云まうひとて心もろく憂を命じて人あり  
 され誰いふも方々其つうへい中りる若の采りうんまど信り  
 あひしよ生國の紀州からはしに付近き以より石山城乃謀士  
 珍本源尾唐門重幸がゆうり乃若とつひを命じたるふど何とら  
 人抱えしりしく人々をせざる業を命じて智恵あげよ見はし心やとく  
 変る若らうらよまよ珍本氏の親族よりやと思ふまよも尾中うの  
 若よてい曾てはしつらんとら用若源と男ありんばあつて



日本書紀卷之六十四



十四

水珠と入る  
屍と揺る



日本書紀卷之六十四



突の語りし極りく重幸が好斗と受てけ不に承と申し居る  
 たりんるとさまぐとえ沙汰しとどきの種るれはとけ男と  
 せいどの女と異名にして郷中乃男女恐まあひくる種るふけさる  
 権に即が家に申あげなる武士一人をかきまひ居世とえのふあ  
 さまよひそと強う体子細こそつらうめと近隣の男女目と付  
 心をともあ寵ふ又殿の侍又鉄炮庵と申しき痕あつて日くよ  
 系より医師と拓きむ久治療とるん体ねり系より頼らとさる  
 石山の軍師鈴木重幸権に即が家に承と強し女病と保書  
 一再び大駭を紛へう又の信長とと候ふ者るべしとらひのじら  
 ねぶ小権に即が耳よこそ入し種も郷中の只けるのそと強う  
 あひ強し種く村中一統後口乃飛科のうととにしあく京都の

町目代もとけ所へおどしとく石の産屋へかくと申出さげし産屋  
 大又肝と強しおる夕飯の食うけして居りくらがおる飯差と  
 とうとえ海し面きたらすらま菜のどく刃をふるにしてヤッる  
 の其を幸とらふ者と男老の者ととらふや胸又孫兵が計策  
 と強し希ま朝比系が勇力をふる人を殺とるの業と外がぶ  
 くと火と強つて家火焼き水とく門くけ村よ来るこそ我こ  
 が運命の盡うる承なるべし天下の武ね信長とよと人幸さ  
 目見世し鈴木本なるぞ今よと目代へ所へ捕まの人殺入百  
 七百来りしうた彼事幸怒りを記し極切よとらるのうら  
 け村乃男女老少一人も命たとらる者いあしにらるあさは  
 時の向又死人のら瓜薬らんとさまぐと返つれい始めく



驚く男女の百姓死物ぐるひの驚くぬ内足弱もを助へ  
 老より成れたとけ切雅をいざなひくは逃出れば後こそ  
 村中の強勃大方ろくは下へとりてはぬけ村より九郎  
 とふる若者あり力飽き強く角力と好腕立と若の業  
 に酒飲りて闘争をば郷中近きと抄ひて思はばと者  
 は今け強勃と見くたは制しを幸ひ信長の懇款石山の城  
 を出さば天下の衆人かく仰くしきつりさまうてを幸とえ  
 逃さば信長云の怒りを受け後悔はとも益あはじ又庄屋の  
 周章もかじたるを幸石山の堅城は務り敵方の軍兵と  
 引て戦へばこそ多くの人と殺し名はる武士の首とえは只  
 一人は村より強と居るの藝をもとと奥のあつと離れはく

何後のみを仕出れば我よ力を添ふ者三又人ありのり  
 道で揃め捕んや何の子細もあさきや汝等力をあはれ  
 我下知よとさうて幸ひは捕らし首尾よく仕保せ後群の  
 獲るるに取んし又取むるにあらばやとむらえ中うに励せは  
 百姓も是をぞと何とま鈴本らんがて鬼とせりあうは  
 其と鉄炮も射さやうとえうしき働きはかりはじき  
 又九郎が云ふ事ありとさういしとらんとしと強しと一層乃  
 若者三十余人又九郎は同心は又九郎大きに敵ひ百姓共  
 下知するの重幸けりをはきく逃し出んも事りはじき  
 三人は後日即ち家のに方又懼伏し若もを幸出奔とんき様  
 子と見ればと吹て相圖とるせよ其時二月ようけをせても





日本信長言後卷六



小堀村  
周章

日本信長言後卷六



余は鉄炮を討殺せん日くい候ふけ履込へをくせり  
付ては捕んこそ十分の勝利なりと志し居り候に石山  
の軍師智勇師と鈴本重幸何なるも御と構へ居ん  
知り居り先系乃御目代へ海へ出捕るの軍兵よを  
強くてとり入ぐり大勢圍んで生え居り誰くハ  
竹槍の用ををどし志し居り働き小も兵糧な  
くつひは「麦大豆のきりひりく家並に集りて  
とくよ中知とれは居座と始り村中の者大  
是すとい中いさびの大酒飲のと人かま  
の軍配兼り殆ど心腹に居り重幸が謀斗軍  
とも入九郎は及ぶはしいで中知のどく  
働くは」と以居り

周章引くく狛鹿引くぬ御殿くまふにぐり引きけり  
くよ証出りたる

百姓入九郎画飾之高名事

京都の目代村長門守が籠の門破るむり  
い小建村の百姓とて一入り河津進  
息つぎ形に呼ぶりけり長門守へ  
白砂へ呼ぶ事の子細と見ゆり小先達  
は石山の軍師鈴本重幸小建村の百姓  
のよとよたよりけり後日  
御智めと思入村中の者密に方  
急ぎ御勢と見ゆり捕へら





百性又九郎  
 持戸郎が  
 完と  
 うん  
 秀松

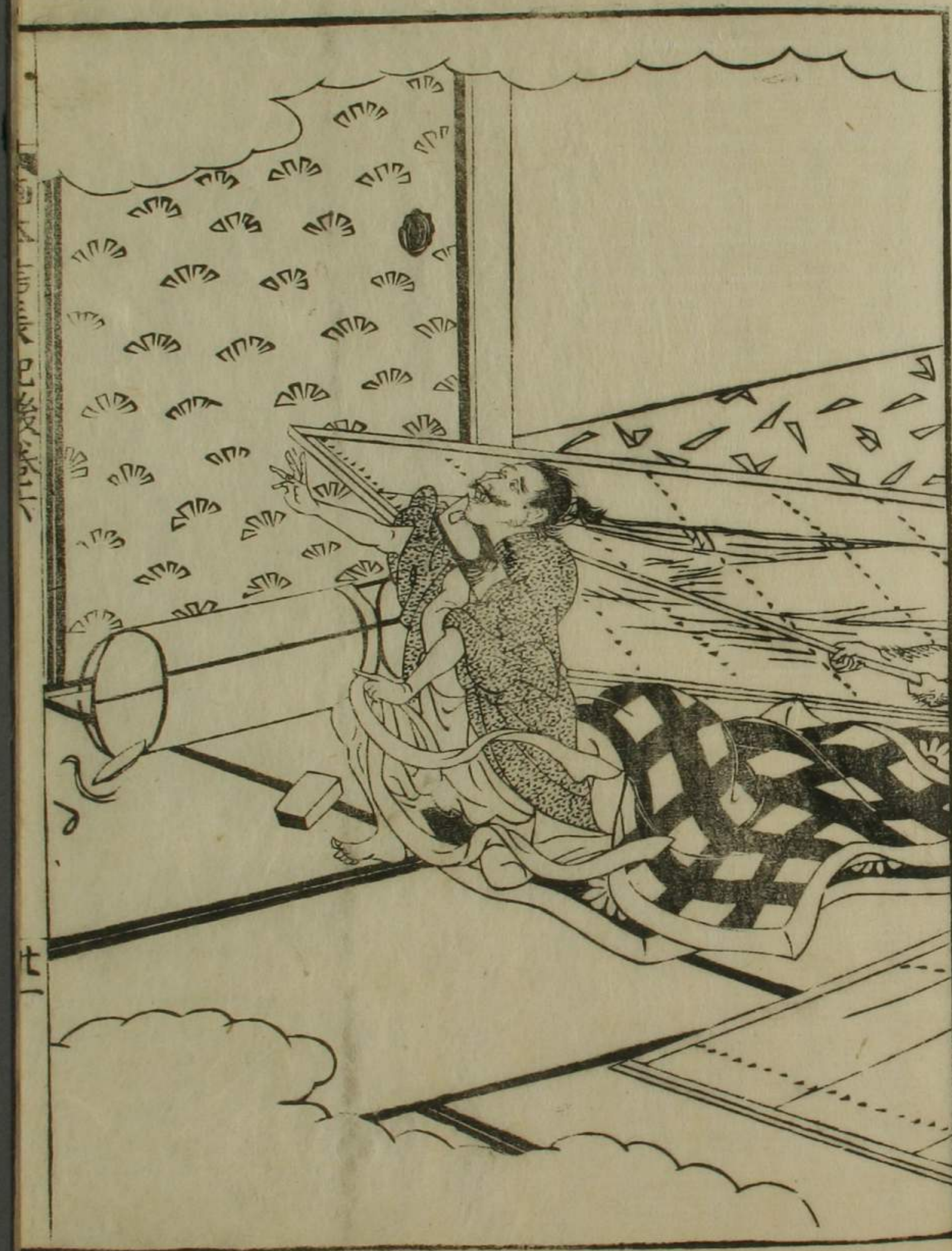




不審るやと人相率齡易は百姓の中衆かゆるは  
 とも似よりたきふもつらび人遠よもあれは  
 捕らんとて捕まのふよ下知し若も実の事幸ら  
 今よ本のし武勇力多固し叶ふはじと鉄炮の組  
 七十余人を畜の村に百余人足懸九三百人都合其勢に百  
 十余人被百姓と毒因者としりてゆりてゆり村へと馳りけ  
 る又九郎彦と佐村にまで出逢へ又九郎役人よややうの  
 重幸の武勇の曲者なりは多人殺押よせ搦め捕んとぬ  
 渠必死にぬ強く働き死傷の者も出まらん河勢の  
 控に即が家のに面と丸圍と河見合せにみづに我まら母ひ  
 へく換子と何の陸を働させぬは仕負せは者なりは言方

の河吹奉て武士よ五五後つらび若も強くて捕へる  
 を敵と鳴し相國とぬしやべし其耐の急よ込へ飛道具  
 おえ後と息も絶れに流るうら子紐とててを  
 控に即が家のに面はきりぐと勢をからり鉄炮の侍人  
 よ丸を既よとのへ又九郎の膽をく力をりる百姓六人と  
 志さぐ人控に即が表はより何ふよよく履入る野の  
 実由志とほしうとは人とも大強勇の珍本重幸一方  
 大敵のしに胸躍り春ふらひいせんとなめし  
 互あふ汲とててらんとてし震ひも少し止まらん竹  
 のよよ行足と踏らるる口の雨戸よもかかけ押勢  
 づぐなり家内り堅固のまきりもあつてそ鴨居ゆるんで離







うんと内には彼重幸と是しくて物事と守りたりや  
 の夢きこゆるよぞむ三がうとはお人もよしや  
 そ浮む濃もろき嚙付ても捕へとい止まじと力を極めてひき  
 ませせば兩戸陵子いぢらうまとい用け其不勤くること飛込を  
 件けんの重幸寝うる蒲團ふとんとわいのつけ表の方へ逃出んを  
 おもふ遠入ありとまゝ楓の謀計とわい人仍り負て款と引んや  
 返へん合せく易者の勝負せよと追さまよ羅腰と蹴けりたりしよ  
 美う門ふけよとと倒して立ちけり又九郎飛う門を首  
 筋えをぐ門とろそ付腕押おてるふふといはしめ表の方  
 の戸を開き石山の燃中こそ降一といひきたる珍本源九郎門  
 耐重幸を山押村の百姓又九郎が擲り捕らるをや出合た人

人々と天に日郷者く大者よを呼ぶふぞに方と望し紐子の  
 大勢むらうくと馳集り彼百人を交え控り郎と後よ引ま  
 させ京都に上りて海うらうけ時疾いかのぐと明後三日中  
 のま妙とやけ事を安修人珍本重幸と山押村て生捕しこ  
 や古今よあし智謀の勇士西郷を見えへ長流りあよせん  
 と老若男女巷ふ出て見物とらうり抄びにし系中もまうこ  
 勅揺せり杖て村母が紐よ引まは長門守の元来重幸この  
 一面のまあり勇士の像と交りまは眾人といじうにれを  
 ぶしく見せしとく先廣間の極側よとし紐子の力と左  
 右につらり殿をよ守護しう長門守の烏帽子大紋具  
 儀を鑑いま出て像とまれば重幸よは似もつらぬ面のまも





村井長門守  
 怒門と百姓  
 答を  
 弘明派





ざめて痛勞さしるる徳浪人之長門守大木小好りまうあう  
 大庭へまこと蹴落し己何者か几が鈴木重幸之つ門より  
 武部の交遊不所嘲罵せらるやま活石部くせいのの曲者まが拷問又け  
 てさくこの次牙白狀させよとわらう又罵守屋と立て入け  
 じは左右の力士彼浪人と宙又引さげ檜に即ともよ先  
 牢獄へ入最極せんくと此間よりふえより鈴木重幸之と  
 仰りし是へ毛毳さうく私りの松尾の社乃津賦りが此以  
 便毒とぬひぬの不浄うりをひて津着の勅を怒り小津村  
 の檜に即り後分りそゆへに彼が家に誘ひ居り藤原の  
 此のこゝとて又よ悪事とあつたる是れはゆゆの  
 魁斗くわいとう又邊城へんじょうの何れか換子かへこそれをも怒りしとちひあし

よねの外がなら大勢弓鉄炮よて名園とは津屋飛へ引出  
 ろり始終何の執事と中ちゆうのりをまきまんに教心して  
 直し又鈴木重幸が名と仰りし乃津去り夏に心得  
 やさぬり何と津流やんやんや実まことに流ながるる小馬麻こま  
 し心地とそんと委細いさいと云上はまひて檜に即り引出  
 紀明きめいとらふ彼者かのが中言ごよあしまたがまは長門守も  
 阿きれとそく信長と乃津安のつやすよつふ面めん目をまふの  
 ばいさる津噴つふんりをや紫むらりうんと怒りそれともいかん  
 とも詮せん方かたかく彼津賦かのつふと檜に即り其す家いへに人ひとさき水  
 津村つむら乃の屋や官かん今いま度たびの一件いつけん藤原ふじわらのふるまひなりとて逃  
 放はなせり是百姓ひやくせい又九郎くわうらうがふる名教なけうといたづる又あうまう



鬼<sup>と</sup>も角<sup>く</sup>も重<sup>し</sup>卒<sup>す</sup>が英<sup>あ</sup>名<sup>な</sup>世<sup>よ</sup>に<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>か<sup>く</sup>ま<sup>て</sup>人<sup>の</sup>恐<sup>そ</sup>ま<sup>ま</sup>  
々<sup>々</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>し<sup>と</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>評<sup>へ</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>

繪本拾遺信長記後篇卷之六終



